

第百八十二回 史跡巡り

古河公方館跡

古河歴史博物館

H3. 4. 28

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

一、日時 平成三年 四月二十八日 (日)

一、集合 越谷駅前 集合 午前 八時三十分 出発 八時四十二分発 伊勢崎行準急

一、行先 JR古河駅 (久喜駅乗換) バス又はタクシー 古河公方館跡 (古河総合公園)

一、コース 虚空蔵堂 → 古河公方館跡 → 徳源院跡 (古河公方足利義氏・義親の墓) → 徒歩
昼食・・・古河歴史博物館 → 帰路 JR古河駅 → 久喜 → 越谷・・・解散

一、参加費 二千円也、但し、昼食は、各自持参の事。

一、案内人 山崎 善司 当会 理事

一、申込 ハガキに住所・氏名・年令・電話番号を明記の上、4月25日迄に申込み下さい。

一、連絡先 谷岡隆夫 方 越谷市宮本町 3の117の8 越谷市郷土研究会 ☎6217527

一、主催 越谷市郷土研究会 会長 小島 誠

以 上

古河市

今から千百年前、付近の農民が原野を開き、一部落を作り、「許我」と名付けた事が、今日の「古河」の地名の起りと伝えられている。

地形的には、西南にかけて低地が広がり、渡良瀬・利根・荒川等が大雨毎に氾濫し、その肥沃土により豊饒になり、五穀も豊かな上、魚も豊富で有ったと考えらる。又、国分寺の影響を受けてか、万葉集に、

まくらがの 許我の渡りの からかじの
音高しもな 寝なへ子 ゆえに

と歌われて居る様に、船の往き来の多い所であったと思われる。

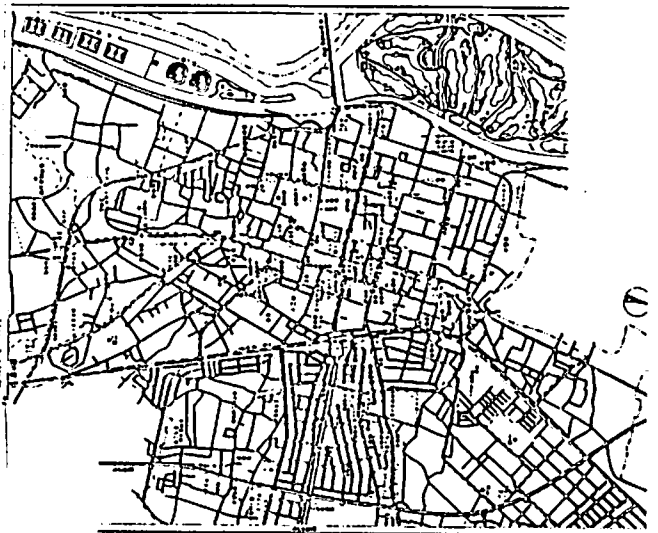
史上に古河が登場したのは、平安の頃と云われ、地方の政治が乱れるに従って、地方には荘園が起り、古河は下河辺の荘に属し、下河辺行平が荘司と成って居る。

頼朝が鎌倉を開いてからは、北の結城・小山・那須氏と共に、鎌倉幕府の北の護として、軍事上・政治上にも重要な拠点として栄える様に成った。

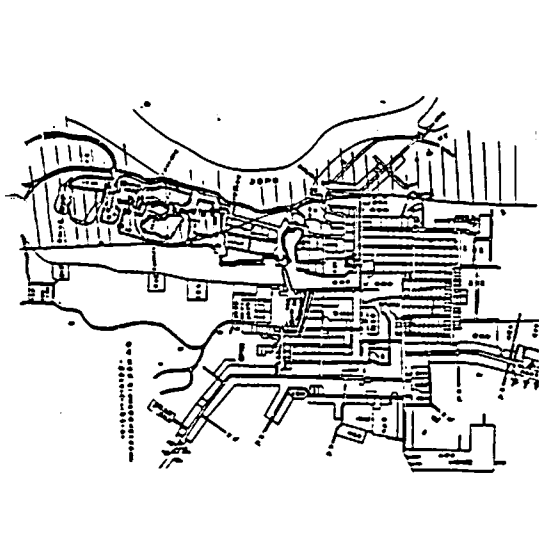
鎌倉中期になり、執権北条氏の勢力下に入り、後、古河は鎌倉公方の料所となる。小山氏は之を不服として、鎌倉公方に抗したが圧せらる。(小山の乱)

公方持氏は京都將軍家と争い、持氏は破れ長子義久と共に滅亡。(永享の乱)

持氏の遺児安王丸・春王丸・永寿王丸の三子を擁して



古河市の位置図



古河城跡の想定図

の結城合戦は結城方の敗北に終る。(結城合戦)

後、辛くも一命を永らえて、成人した永寿王丸は、將軍の許を得て、鎌倉に帰り足利成氏を称したが、やがて京都將軍家と争い、鎌倉を捨て古河に居城するに及び、関東の形成は一変し、古河は関東の政治・文化の中心となり、古河公方時代が始まるのである。

註、古河市史には、「結城合戦の時永寿王丸は、兄達と共に捕えられた」と有るが誤りで、「永享の乱の時六才にして、萬寿王丸と云い信濃の大井氏の下に逃れ、結城合戦には参加していない」。「実は、萬永寿王丸の弟で、乙若王丸で、後に雪の下殿と云、定尊と云う人物である」と。(古河市史通一)

古河公方「成氏・政氏・高基・晴氏・義氏」の五代の間に(百二十八年)、古河に鎌倉文化が移入され、長谷観音、若宮八幡等、鎌倉から移された鳳桐寺尊勝院等、関係史跡が、今も数多く伝えられている。

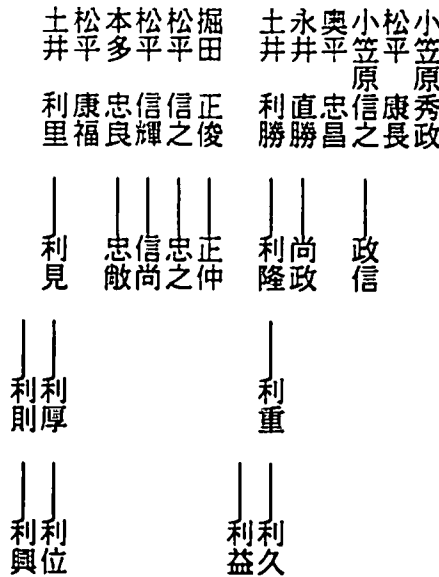
尚、中世の医聖と云われた田代三喜や、連歌師猪苗代兼裁も、此の頃古河に在って、古河地方に文化興隆をもたらした人々である。

又、古河で行われている夏祭(ささら)は、成氏の時代に、悪病退散を願って初められたものと伝えられている。

近世になって、徳川家康が江戸に入るや、北条氏の善政を生かし、要所に徳川譜代の大名が配され、関八州が統治されるに従い、公方時代に別れを告げ、一諸侯の地となつて、急速に城下町としての立た住いを見せる様になつた。

武治主義から文治主義に変わり、江戸開府に伴い、奥羽街道と水道の要地として、北の護りは更に重要な位置を占める様になり、急速に城下町としての立た住いを見せる様になつた。

徳川時代古河に入部した諸侯は、次の通りである。



土井氏を最後に、十一氏の古河入部に、城郭の整備、町方、在方の発展、藩学の創設、藩学の導入等、政治、経済、文化の興隆も目覚ましいものが見られ、之等の史跡や史料も数多く残されている。

土井利興の時代に廃藩置県が施行され古河県となり、明治から大正を経て、昭和二十五年に市制施行となる。現在首都圏内の都市として発展途上であり、特に近年の発展は目覚ましいものがある。

古河公方館跡

古河公方館跡は、古河市内鴻巣地内に有る。現在は、鴻之巢運動公園として市民のリクレーションの場として親しまれている。

此の地は、広大な城館跡で掘や城跡が、中世の古河公方の盛衰の跡が偲ばれる様な物悲しい面影が良く残されている。

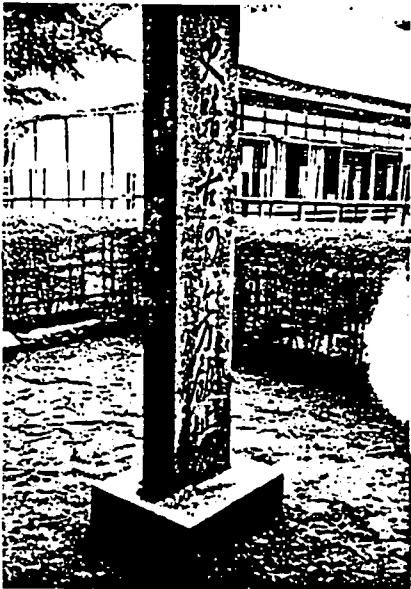
城内徳源院跡地には、義氏・義親の墓があり、県指定史跡として残り、広大な自然の掘りの向台地には、古河公方館跡があり、静かな森林の中に、館跡の碑が建っている。

其の隣には、茨城県指定文化財の旧中山家屋敷と国指定文化財の飛田家屋敷が原形に忠実に復元されて保存されている。

古河公方館跡は、足利成氏が、康正元年、鎌倉を棄てて古河の地に入った当初に築いた城であったが、長禄元年（一四五七）下河辺行平築城の古河城を取立て移り、以後政氏・高基・晴氏・義氏と変遷するが、其の間古河公方家の別館として使用されていた。

成氏没後の公方家は、衰微の一途を辿るが、二代政氏と子高氏（後の高基）との関係が悪化して、政氏は久喜の甘棠院に隠居し、其処にて没し、三代高基の弟義明は、千葉の小弓にて小弓公方を称したが、下総鴻ノ台の合戦にて破れ討死す。

高基の子晴氏は、母が梁田の女、子義氏は母が北条氏綱の女であったが、北条氏康に敵対した為に、氏康に攻



古河公方館跡



古河公方館跡望遠

められ、晴氏と子藤氏は関宿に籠められ、代って義氏が五代公方と成る。

註、晴氏の墓は関宿の観照山宗英寺に在る。

北条氏は、義氏を古河の城主とし、此処に名実共に関東公方を支配下に置く事に成り、永年の宿願が成るが、天正十(一五八二)年義氏没す。氏姫一人となる。

義氏が没した時、公方家は北条氏の支配に在る為、当時九歳だった氏姫の後見をしたが、同十八年、秀吉により北条氏が滅びると、古河城も同じ運命と成った。

秀吉は名家の絶えるのを惜んで、小弓御所左兵衛督義明の、嫡男右兵衛門督頼純の、息国朝を氏姫に配して、喜連川に四百貫・古河の地に三百貫を給した。以来、足利氏喜連川家は、古河と喜連川とに居す。

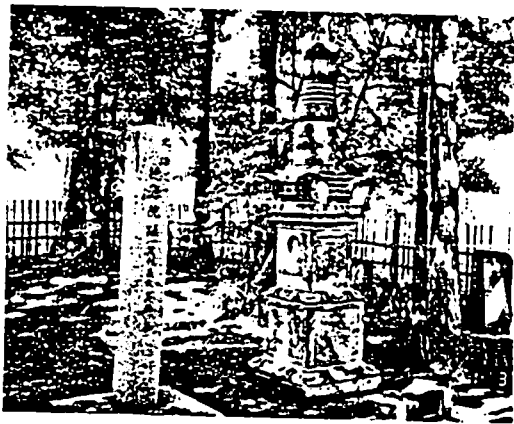
国朝は朝鮮の役で、病没したので、氏姫は国朝の弟頼氏に逆縁となり、義親を生んだ。

寛永四年(一六二七)、義親が古河の地で没し、同年頼氏も喜連川に没するに及、古河は御料所として召し上げられた。かくて成氏が築いて以来、百七十年に渡った古河公方館も廃城と化した。

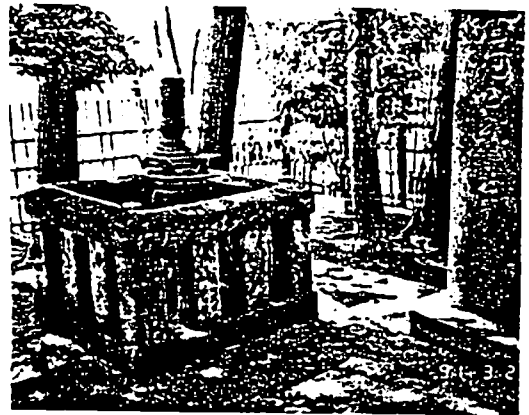
註、鴻之巢の徳源院跡の墓地には、足利義氏・と義親の墓(県指定史跡)がある。

又、近くの子安地藏菩薩尊(県文化財)は、氏姫が鎌倉から勧請して来たものと云う。

寄木造で鎌倉期の作とされ、金色に輝く座像で、(木造子安地藏菩薩像)其の慈悲深い面差しは、悲運の内に滅んだ古河公方の菩提を弔うかの如くである。



足利義親の墓



足利義氏の墓

古河公方に付いて

関東の主である鎌倉公方は、將軍足利尊氏二男基氏が貞和五（一三四九）年七月、京から鎌倉に下向した時より始まる。

鎌倉公方は初代基氏、二代氏満、三代満兼と代を重ねる毎に強大化し、専制的になり、幕府との関係も微妙になって行った。

四代持氏の代になると、強大化は頂点に達し、幕府の大目付け役関東管領上杉憲実と対立、遂に幕府は永享十（一四三八）年持氏追討の軍を發した。（永享の乱）

翌年、持氏は幕府軍に破れ、子義久と共に自殺し、鎌倉公方は滅亡した。

鎌倉を脱出した持氏の遺児安王丸・春王丸は永享十二（一四四〇）年、下総結城の結城氏朝等に迎えられて、結城城に籠城した。（結城の合戦）

結城城は、幕府軍に包囲され、翌年遺児達は、捕らえられて殺され、氏朝は自刃して落城、一連の動乱が納まったかに見えたが。

同年六月、將軍義教が暗殺される（嘉吉の乱）事件が起き事態は急変し、再び信濃佐久の大井持光の下に逃れていた遺児万寿王丸（後の成氏）や、遺臣上野新田の岩松持国達が、公方復活へ活発に動き始める。

萬寿王丸は関東足利氏の家督相続を宣言し、足利鐮阿寺に鎌倉掃還の祈禱を続けさせたが、鎌倉府の奉行人は了解していた様だ。

註、一般には、「結城城にて捕られたのは、永寿王丸で美濃土岐家に預られ、後、公方成氏となる」と云わるが、其の後の研究にて「成氏が萬寿王丸で、信濃佐久の大井氏に隠れ成人して成氏となる」事が判明した。

永寿王丸は誤で、弟乙若王丸の事で後に、雪ノ下殿定尊と云われる人物である。（古河市史）

文安四（一四四七）年、幕府は萬寿王丸が公方を継ぐ事を認めたので鎌倉に掃還する事が出来た。

公方に就任した萬寿王丸は、宝徳元（一四四九）年に將軍義政の一字を得て「成氏」と名乗った、公方を補佐する関東管領には、上杉憲実の子憲忠が就任した。

今日十七日繪旨併
御旗到来候上者、
近々可有還御候、
然者、不日令出陣
可致忠節候、謹言

十二月廿九日
万寿王丸

石川中務少輔殿

石川中務少輔殿

成の後の 状催促勢軍 万寿王丸

鎌倉府の体制が復活したが、公方成氏及旧臣や北関東の小山・宇都宮氏等と、管領憲忠や其の家臣層等との対立が、宝徳二(一四五〇)年四月、江の島合戦に発展した。(江の島合戦)

江の島合戦は幕府の仲介にて一応解決したが、両者の対立は根深く、享徳三(一四五四)年十二月、成氏は、憲忠を謀殺し、鎌倉より上杉氏勢力の一掃を企てた。

上杉氏は、憲忠の弟房頭を擁立して、幕府に救援を求めた。翌四年幕府は、成氏を朝敵として追討軍を起し、之に錦旗と綸旨を与えたので、関東・信濃・甲斐・駿河の兵は大方之に従った。

願書

武蔵國太田庄駕宮大明神

右意趣有天下泰乎武運安

特今度凶徒寺患令退治方

屬木意者三郡并所郡

匠銭為由仁之修造可奉進

之三前狀如件

享徳五年正月十日

左兵衛督 源朝臣成氏花押

願書

武蔵國太田庄駕

宮大明神 右意

趣者、天下泰平

武運長久、特今

度凶徒等悉令退

治、方々屬本意

者、以足立郡併

崎西郡之段銭、

為当社之修造可

奉寄進之立願

狀如件、

享徳五年

二月十日

左兵衛督 源朝臣成氏花押

武蔵國太田庄駕宮大明神願文成氏利足

成氏時代

成氏は鎌倉を捨て、下総古河に逃れ、其処を拠点として各地に出撃した。古河公方の成立である。

享徳四年七月二十五日から、改め康正と年号が変わるが、成氏は之に従わず、享徳二十七年(文明十年)迄、享徳年号を使用した。

古河に本拠を移したのは、御料所下河辺庄にあり、西隣太田庄と共に公方則近梁田・野田・一色・佐々木等の所領であると共に、北関東の豪族層の佐竹・宇都宮・小山・皆川氏等の支持が背景にあり、上杉と対峙するに前面に利根水系の大河が控え守り易いと考えられる。

幕府は、將軍義政の弟政知を鎌倉公方として、伊豆堀越に下向させ体制を固めた。

上杉方は、深谷を本拠として五十子陣・河越・岩槻・江戸の各城を堅固にし、成氏も又、騎西郡を前線として各城を整備し護りを固くして之に對し、東上野・武蔵各地で戦いが始まる。

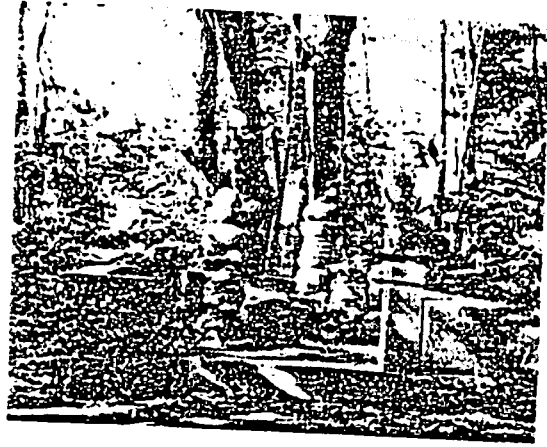
文明三(一四七一)年、古河城は、上杉方に攻められ落城し、成氏は一時千葉孝胤を頼り逃れるも、翌年には古河を回復する等、一進一退の激戦死闘が続く。

文明十四(一四八二)年十一月、成氏と幕府軍とは、正式に和睦し此処に三十年に渡る享徳の乱は終る。

註、明応六(一四九七)年、成氏没す。野木町野渡満福寺に葬られている。

政 氏 時 代

長享三（一四八九）年頃、政氏が二代古河公方に就任したと見られる。政氏も又、大乱の中に身を置く事となる。享徳の乱が終って間もなく、山内上杉顕定と扇谷上杉定正の対立が激化して行くのである。



墓福寺の萬福寺
成野氏の野木町足利

文明十八（一四八四）年、太田道灌を謀殺した定正は山内顕定に対抗する為に古河公方に接近した。

長享二（一四八八）年、長享の乱が始まり、相州実時原（現伊勢原市）・武蔵菅谷原（現嵐山町）・高見原（現小川町）で合戦が行われた。

政氏は、定正を支援して、高見原に出陣した。上杉定正は、明応三（一四九四）年、五十子の陣中にて急死し甥の朝良が扇谷家を継いだ。之の機会に政氏は、山内顕定と結ぶ。

顕定が、永正七（一五一一）年、越後にて戦死する迄公方―管領体制が続く。

和睦事、まゝ懸りて旨上候
之旨上杉民部大輔
房定致注進之間、
不可有子細候、次
政知事、無不足之
様申合せ之由、同
房定申候、可然候
仍如件、

十一月廿七日

花押

左兵衛佐殿

文書川連喜（内書御政義利足）

左兵衛佐殿

政氏の時代は、北条早雲が関東へ進出を開始した時でもある。早雲は、延徳三（一四九一）年に、伊豆堀越の足利茶々丸を討ち、明応四（一四九五）年には、扇谷上杉方大森氏の小田原城を略奪した。

北条氏は、相模守護職上杉朝良に従い、永正元（一五〇五）年、立河原合戦で政氏・顕定連合軍と戦ふ。

早雲の存在は、関東諸情勢にも微妙な影響を与え、公方家にも早雲の存在に絡む動きが出て来て、内紛が展開された。

即ち、政氏と子高氏との間に確執が始まるのである。

この父子の対立は、上杉顕定の調停により和睦、同六（一五〇九）年に高氏は出奔先の宇都宮から古河に戻り高基と改名したが、然し、同六〇七年顕定越後に陣を契機に内紛が再発した。

此沙動産は信官茲を
越後速う波越のび友
御一戦、可為御安
兵議等被申意見候
者、可然候、巨細
被仰合代官候、
九月廿日
政氏 花押
謹言



小山小四郎殿

足利政氏書状—小山泰朝氏所藏—

小山小四郎殿

大光山龍興寺之事
長春院殿御牌所之
切封墨引
端裏
政氏

七月三日

材室良西堂

政氏 花押
材室良西堂

足利政氏安堵状—龍興寺文書—

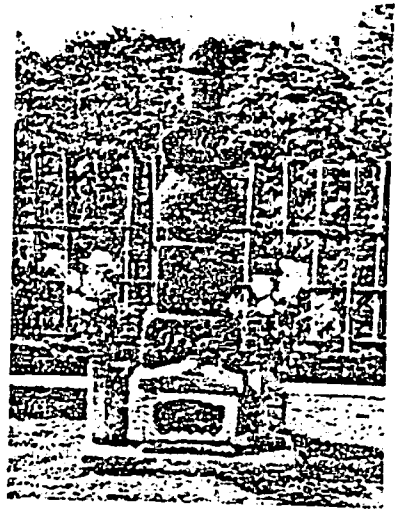
高基は関宿城へ移り、政氏の子義明も太田庄で蜂起した、この時早雲は武蔵権現山に出陣、反上杉勢力を糾合し、高基に支援を行なっている。

越後に出陣した顕定が戦死した事は、政氏に取っては打撃であった、管領上杉家にも後継者を巡り、内紛が生じ、公方家と上杉家とが連動して、

同九（一五一一）年六月、政氏一頭実（頭実は政氏の子）に対して高基一憲房の図式が崩れ、鉢形城の頭実は憲房に急襲されて、逐われた為に、政氏も不利となり、

同年古河城を出て、小山成長を頼り逃れ、高基は、古河城に入城する。

同十三（一五一六）年、政氏は、高基派となった小山氏に逐われ、扇谷朝長の岩槻城に逃れるも、



足利政氏の墓—久喜甘棠院—

永正十五（一五一八）年、久喜館に入り隠退、其の館に甘棠院を建て開基となる。政氏は、享祿四（一五三二）年、此の地に没す。

高基の時代

高基は、父政氏との争に勝ち、政氏を隠退させたが、新たな抗争が待っていた。

高基の弟義明は、武田・里見氏等に擁立されて、小弓（現千葉市生実）御所を称し、関東の覇者を目指していた、古河公方家にとって、小弓御所の存在は、脅威と成っていた。

然し乍ら、高基の代には、小弓御所義明を打倒する事は出来ないかった。

又、高基の晩年には、子晴氏（北条氏綱娘を嫁す）との間にも内紛が起き、其の結果高基は隠退させられ、

天文四（一五三五）年十月、古河公方高基没す。

禁制

碓辺郷之内大坊

- 一 軍勢甲乙人等
- 一 濫妨狼藉事
- 一 号公用細事申付候之事
- 一 通世者等強々
- 一 仁所望之事

碓辺郷之内大坊

- 一、軍勢甲乙人等
 - 一、濫妨狼藉事
 - 一、号公用細事申付候之事
 - 一、通世者等強々
 - 一、仁所望之事
 - 右、条々有違犯之輩者、可被処罪科之状、依仰下知如件、
- 大永三年 十月十二日
- 式部大夫花押

足利高氏禁制—勝願寺文書—

晴氏時代

晴氏は、公方就任後、小弓御所足利義明の脅威に曝されたが、単独で戦う力が無いので、北条氏綱の力を借、天文七年十月、義明・里見軍と北条軍と下総国府台城で戦った。（第一次国府台合戦）

之の合戦で、義明・基頼兄弟は討死し、里見氏は、安房国に退き、晴氏は、足利氏内紛の抗争を克服出来たが北条氏綱に大きな借りが出来た。

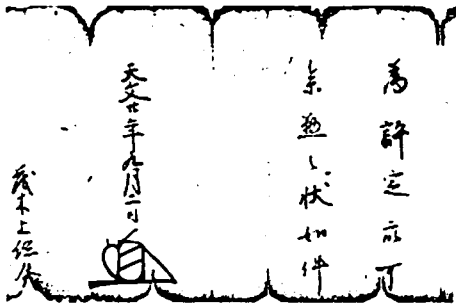
氏綱は、娘芳春院殿と結婚させ、梅千代王君を生み、
 (後の義氏)之の梅千代王君を介して、北条氏は、公方
 家に直接介入して来る事となる。

晴氏は、天文十五年の河越合戦に上杉方に味方して、
 北条氏に敵対したが、上杉方はこの戦いに破れた。

之の為、更に強く北条氏の介入を招く事となる。
 晴氏は、後継者に梁田氏の娘の子幸千代王丸(後の藤
 氏)と決めて居たが、北条氏康は、晴氏に圧力を掛け、

同二十一(一五五三)年、梅千代王丸(後の義氏)に
 家督を相続させた。

天文二十三(一五五四)年、北条氏康は、晴氏と藤氏
 の討伐命じた、晴氏・藤氏は共に氏康に敵対したが破れ
 て、晴氏・藤氏は捕われ、相州奏野に籠られる。



今度於国府台
 抽粉骨走廻候之
 条、感思召候、
 謹言、「晴氏」
 十月二十一日
 花押
 伊東右馬允殿

足利晴氏感状(伊東文書)

此書は、晴氏と藤氏との関係を示す文書である。晴氏は、天文十五年の河越合戦に上杉方に味方して、北条氏に敵対したが、上杉方はこの戦いに破れた。晴氏は、後継者に梁田氏の娘の子幸千代王丸(後の藤氏)と決めて居たが、北条氏康は、晴氏に圧力を掛け、同二十一(一五五三)年、梅千代王丸(後の義氏)に家督を相続させた。天文二十三(一五五四)年、北条氏康は、晴氏と藤氏の討伐を命じた。晴氏と藤氏は共に北条氏康に敵対したが、破れて捕われ、相州奏野に籠られた。

小山泰朝氏所蔵



足利晴氏の墓(関宿宗英寺)

足利藤氏書状(小山泰朝氏所蔵)

同、十二月、晴氏は、関宿に掃され籠められる。
藤氏は、逃亡したと云われる。

註、関宿町宗英寺に晴氏の墓が、微かに足利朝臣と読める五輪塔が寂しく建つてゐる。

義氏の時代

義氏は、天文二十三年頃、母芳春院殿と共に小田原に移つたと見られ、小田原で元服し、次いで鎌倉葛西ヶ谷に移り「葛西様」と称された。

義氏は、母芳春院殿と瑞雲院（後芳春院）周興に補佐されたが、公方の奉行人体制が梁田氏中心から、次第に周興中心へと移つて行つた。

永禄元（一五五八）年、義氏は、梁田氏の関宿城に入り、梁田氏は古河城に移つた。之は、北条氏の梁田氏に對する配慮である。

同、三（一五六〇）年、上杉謙信は、関東に出兵、関宿城は、包囲され義氏は、江戸城に脱出した。

義氏の脱出後、関宿城には再び梁田氏が入つた。梁田氏は反義氏・反北条氏を中心として、天正二（一五七四）年閏十一月迄関宿城を死守したのである。

一方、梁田氏の古河城には、義氏の兄藤氏（梁田氏の娘の子）が古河公方に擁立されていた。

然し乍ら、謙信の去つた永禄五（一五六二）年、北条氏は古河城を攻略している。

御當家お孫に於不

下るお違ひ状如件

天文廿二年十二月十二日
晴氏 花押

梅千代王丸殿

梅千代王丸殿

御之神領、何モ

御之神領、何モ

如近年、下可有

如近年、下可有

相違之状如件

相違之状如件

朱印印文大和

天文廿三年十二月廿三日

天文 廿三年 寅 甲

十二月廿三日

鷺宮神主民部大輔殿

梅千代王丸殿

梅千代王丸印判状（後義氏）

足利晴氏判物（喜連川文書）

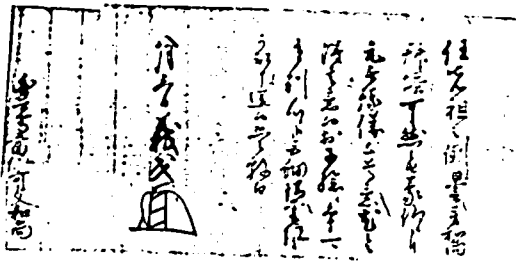
義氏は、関宿城を脱出して以来、北条氏の庇護の下、各地を転々として居たが、古河へ復帰出来たのは、越相同盟成立後の永禄十二（一五六九）年八月の事である。

義氏は漸く、名実共に古河公方と成る事が出来た。

古河に入った義氏の後見役は、栗橋城主北条氏照であった。

氏照は、梁田氏対策の責任者でもあり、天正二年関宿城攻略をして、古河・栗橋・関宿を押え、北関東進出の橋頭堡とした。

古河公方は、関宿合戦を契機に北条氏の領国支配体制下に編入され、古河公方は、北条氏の領国支配体制の中に組込まれて行くのである。



封紙上書
一円覚寺当住奇文
和尚 義氏

端裏 切封墨引 任先祖之例、疊芳和尚 拜塔可然之由、蒙仰候、自元無予儀上、尊意尤令得其意候、於子孫争可有別心候巨細瑞雲院主可被申送候、恐々敬白
八月三日 義氏 花押
円覚寺当住奇文和尚

（寺文書 興龍 狀書 氏義 利足）

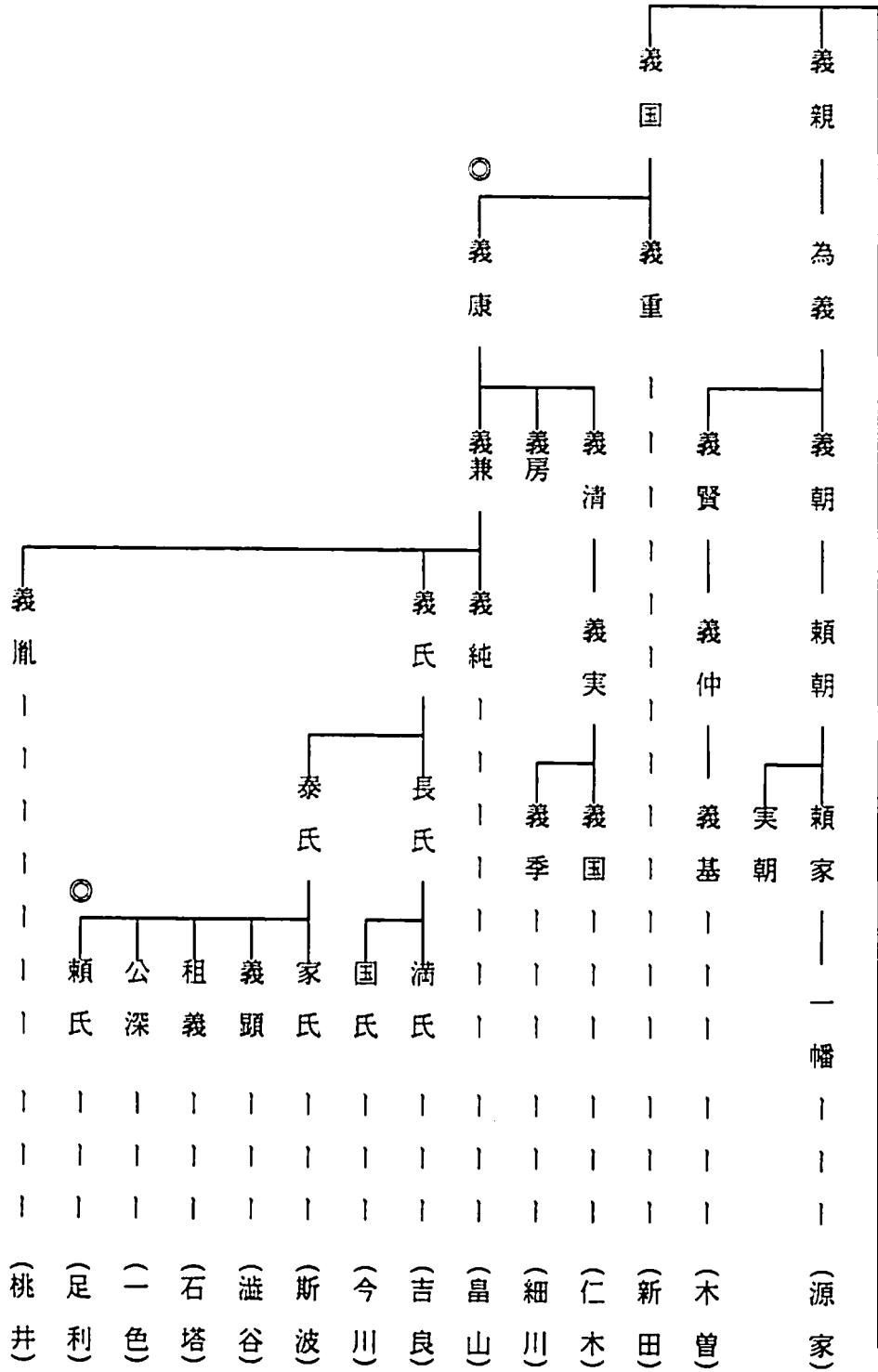
就干 開山三百年
忌、赦帳五通、相
公儀雖御在位無之
候、申調進置候、
御当家御相続之上
御直判追而調進候
恐々敬白
芳春院 昌寿
一色右衛門佐氏久
町野太郎 義俊
小笠原兵庫頭氏長
高 修理亮 氏師
梁田右馬助 助実
永仙院三伯 昌伊
六月三日
正統院 衆中

北条氏の北関東進出の橋頭堡と成った古河城は、戦国時代の城郭として整備されて行く、「城内捷書」の制定等は其の一例であり古河の位置を示すものである。
義氏は、天正十年十月、小池肥前守に感状を出したのを最後に、同年閏十二月二十日、古河城で没す。
義氏の子、梅千代王丸は夭折して居るので、氏女（うじひめ）が一人残された。
義氏没後は、松嶺昌寿・一色氏久等の連判衆が支え、この体制が天正十八年北条氏滅亡後迄続き、秀吉の計らいで「氏女」は、小弓国朝と結婚、国朝が古河公方家を相続した。（喜連川足利家）

以上

足利氏系譜 其の一

清和天皇 — 貞純親王 — 經基 — 滿仲 — 賴信 — 賴義 — 義家

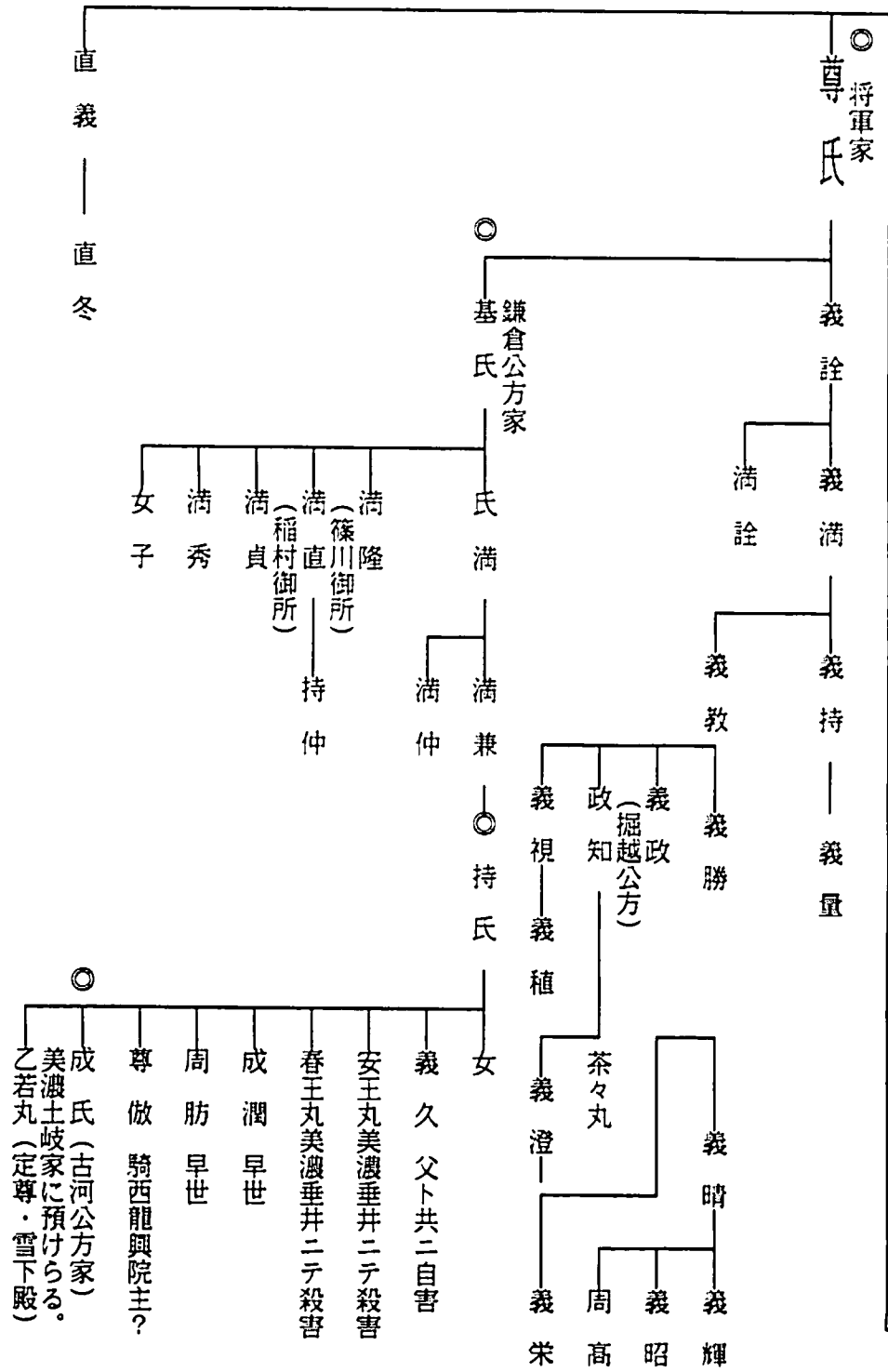


◎足利家
義康

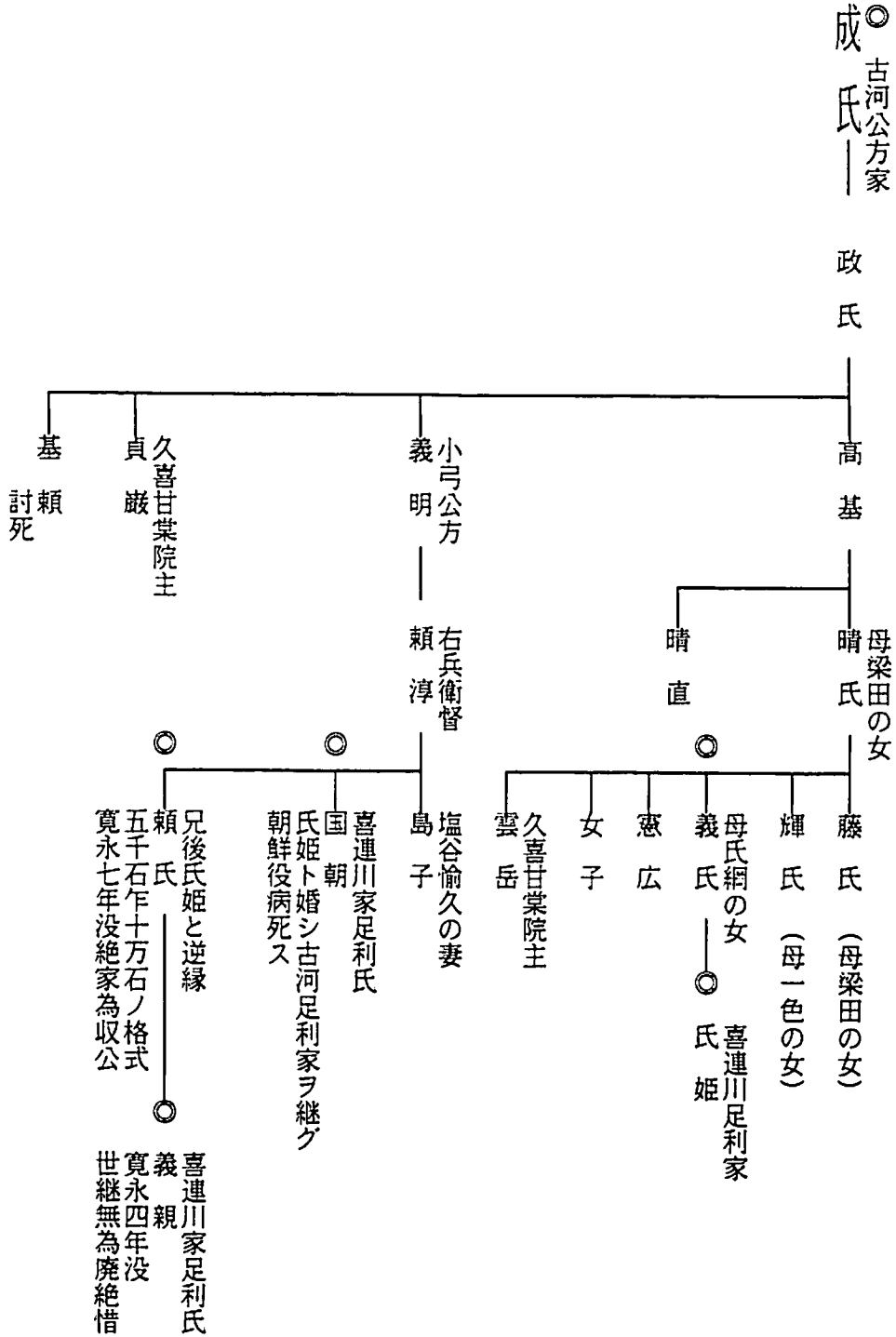
足利氏系譜

其の二

義兼 — 義氏 — 泰氏 — 頼氏 — 家時 — 貞氏



足利氏系譜 其の三



参 考 資 料

古 河 市 史
古河公方文書集
古河の歴史
茨城の歴史
日本城郭全集
小田原秘鑑

第百八十二回
史跡巡り (古河市地区)

発行日 平成三年四月二十八日

主催 越谷市郷土研究会

越谷市宮本町3-1-117
谷岡方 ☎ 62-17527

案内人 山崎善司

印刷所 越谷市弥生町一の九

山崎企画工房
☎ 62-13733